

沼

芥川龍之介

青空文庫

おれは沼のほとりを歩いてゐる。

昼か、夜か、^{よる}それもおれにはわからない。唯、どこかで蒼鷺^{あをさぎ}の啼く声^{こゑ}がしたと思つたら、鳶^{つたかづら}葛^{おほ}に掩^{おほ}はれた木々の梢^{こぎすゑ}に、薄^{うす}明^{あかり}りの仄^{ほの}めく空が見えた。

沼にはおれの丈^{たけ}よりも高い芦^{あし}が、ひつそりと水面をとぎしてゐる。水も動かない。藻^もも動かない。水の底に棲^すんでゐる魚も——
魚がこの沼に棲んでゐるであらうか。

昼か、夜か、それもおれにはわからない。おれはこの五六日、この沼のほとりばかり歩いてゐた。寒い朝日の光と一しよに、水^{みづ}の匀^{にほひ}や芦^{あし}の匀^{あし}ひがおれの体を包んだ事もある。と思ふと又^{えだかは}枝

蛙づの聲が、 蔦つた葛かづらに蔽おほはれた木々の梢しほから、一つ一つかすかな星を呼びさました覚えもあつた。

おれは沼のほとりを歩いてゐる。

沼にはおれの丈たけよりも高い芦あしが、ひっそりと水面をとざしてゐる。おれは遠い昔から、その芦の茂つた向うに、不思議な世界のある事を知つてゐた。いや、今でもおれの耳には、 Invitation au Voyage の曲が、絶え絶えに其処そこから漂ただよつて来る。さう云いへば水の匀ひとや芦の匀ひとと一しよに、あの「スマトラの忘れな艸くさの花」も、蜜のやうな甘い匀ひとを送つて来はしないであらうか。

昼か、夜か、それもおれにはわからない。おれはこの五六日、その不思議な世界に憧あこがれて、 蔦つた葛かづらに掩あひだはれた木々の間を、

夢 現のやうに歩いてゐた。が、此処に待つてゐても、唯芦と水とばかりがひつそりと拈がつてゐる以上、おれは進んで沼の中へ、あの「スマトラの忘れな艸の花」を探しに行かなければならぬ。見れば幸、芦の中から半ば沼へさし出てゐる、年経た柳が一株ある。あすこから沼へ飛びこみさへすれば、造作なく水の底にある世界へ行かれるのに違ひない。

おれはどうとうその柳の上から、思ひ切つて沼へ身を投げた。おれの丈より高い芦が、その拍子に何かしやべり立てた。水が呟く。藻が身ぶるひをする。あの 蔦 葛に掩はれた、枝蛙の鳴くあたりの木々さへ、一時はさも心配さうに吐息を洩らし合つたらしい。おれは石のやうに水底へ沈みながら、数限り

もない青い焰が、目まぐるしくおれの身のまはりに飛びちがふやうな心もちがした。

昼か、夜か、それもおれにはわからない。

おれの死骸は沼の底なめらかの滑な泥よこたに横はつてゐる。死骸の周囲には

どこを見ても、まつ青さをな水があるばかりであつた。この水の下に

こそ不思議な世界があると思つたのは、やはりおれの迷まよひだつたの

であらうか。事によると Invitation au Voyage の曲も、この沼の精

が悪いたづら戯だまに、おれの耳を欺だましてゐたのかも知れない。が、さう思

つてゐる内に、何やら細い茎が一すぢ、おれの死骸の口の中から、

すらすらと長く伸び始めた。さうしてそれが頭の上の水面へやつ

と届いたと思ふと、忽ち白い睡蓮すゐれんの花が、丈の高い芦に囲まれ

た、藻の勻のする沼の中に、
 的てきれきと鮮あざやかな苔かたを破つた。

これがおれの憧あこがれてゐた、不思議な世界だつたのだな。——お
 れの死骸はかう思ひながら、その玉のやうな睡蓮すゐれんの花を何時いつま
 でもちつと仰ぎ見てゐた。

(大正九年三月)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

沼

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>